Silence : c'est la voix qui se traîne, un peu lasse,
De la dame de mon silence, à très doux pas
Effeuillant les lis blancs de son teint dans la glace ;
Convalescente à peine, et qui voit tout là-bas
Les arbres, les passants, des ponts, une rivière
Où cheminent de grands nuages de lumière,
Mais qui, trop faible encore, est prise tout à coup
D'un ennui de la vie et comme d'un dégoût
Et, — plus subtile, étant malade, — mi-brisée,
Dit : « Le bruit me fait mal ; qu'on ferme la croisée… »

Du Silense

Seigi Sagami

『灯りを消して、静かに……音を立ててはいけないよ。息をひそめて、私の側においで。彼等が私達に気づかず、向こうに行ってしまうまで……』
『どうして、音を立ててはいけないの？』
『人間が来るから。……ごらん、杭を持った男達が私達を探している……彼等はあれで私達の心臓を串刺しにし、私達の住処を焼き払うのだ』
『どうして？　僕らは何も悪いことをしていないのに……僕、人間と遊んだよ？　花をプレゼントしたら、喜んでいたよ？　リサは、僕が血をあげて助かったよ？　どうして――――』
『私達は、兵器だから。……人間が人間を殺すために、人間に創られた、兵器だから……』

一　奇妙な死体たち

大気は温く、湿り気を帯びて、焼けつく夏の太陽のもとにゆるやかな凝りを生んでいた。
そよ吹く風もない、刈り込まれた青草のきつい匂いのする庭で、アイオロス・ウィンストンは額に皺を寄せて足下に横たわる人物を見詰めていた。ジジ、と騒がしい蝉の声、吹き出し全身を伝う汗と、汗に張り付いたシャツの上から照りつける日差し。全てが煩わしく、アイオロスは緩く頭を振り、その途端に飛び散った汗の玉を見てちっ、と小さく舌打ちした。
――大手製薬会社の社長だ。……こりゃ、メディアがまた騒ぐぞ……
アイオロスは、ちらっと腕時計を確かめた。午後十二時半。それから、iPhoneで撮り溜めた写真をメールに張り付け、一言短いメッセージを添えて送信ボタンを押した。
隣で作業をしていた鑑識が、飛行機の離陸音のようなサウンドを聞いて顔を上げ、アイオロスを睨んだ。
「ウィンストンさん、勝手に現場の写真をばらまかれちゃ困りますよ！またうちが流出したって責められるんですから」
「大丈夫だって。自分宛に送っただけだから」
そんなはずがあるか、とそのしかめ面が言っていたが、アイオロスは綺麗に無視して入道雲の積み重なる空を見上げた。
もうそろそろひと雨きて欲しいところだが、最近は夕方に降ってもおし

め り程度で、余計に湿度が増すばかりだ。
ここ数年、ロンドンでは猛暑の夏が続いている。暑くなると頭がイカれる連中も多いのか、今年の夏もあちらこちらで暴行事件や暴動が起きていた。アイオロスが関わっているのは、七月初旬から続く奇妙な死体の事件だ。とはいえ、最初からその事件性が注目されていたわけではない。
一件目の被害者は五十才の白髪の浮浪者だった。死因は貧血。被害者の生活習慣から考えて、病死としてもまったくおかしくない死因だったため、それ以上踏み込んだ調査は行われなかった。
この件が広く知れ渡るようになったのは、二人目の会社員（三十六才）の変死が確認された後だ。
この会社員は一週間前に人間ドックを受けていて、オールAの診断結果が下っていたにもかかわらず、重度の溶血性貧血のため自宅で死亡した。当初は病死として処理されたが、会社員の両親がその診断結果に納得せず、再調査を依頼したところ、血液の量そのものも激減していたことが判明。人間ドックを受けてから死亡するまでの一週間の間に、何か大量に失血する出来事があったはずだが、体には大きな傷はなく、ただ首筋に二カ所、何かに噛まれたような跡があるだけだった。
被害者の母親が、吸血鬼を模した犯行だと騒いだため、事件は現代の吸血鬼による犯行として、まずメディアによって公にされた。
そして更に一週間後。
今度は、二十一才のロックバンドのボーカルが自宅で同じ状態で発見された。ここに至り、ついに警察もこの件を連続犯罪の疑いありと調査を始めた。何故なら、この三人目の被害者によって、被害者の共通点が明らかになったからだ。
全員が、生来のホワイト・ブロンド。北欧諸国ならまだしも、ここイギリス南部では決して一般的な髪色ではない。
……まったく、奇妙な死体たち、だ。
これで、七月から五件目。……いや、正確には、アイオロスは、もう一体これと良く似た死体を知っている……。
アイオロスの胸ポケットでiPhoneが鳴った。アイオロスはほくそ笑み、FaceTimeのボタンを押した。画面の向こうに、漆黒の髪を整髪料で撫で付けた医者が、苦虫を噛み潰した表情で写っていた。
『だから、事件の度に俺を使うのは止めろというんだ。お前のところには、それ専門の医者がいるだろうが！』
「ああ、シュラ、サンキュー！　いやいや、お前の方が話が早いからさ。で、どうだった？」
『どうだったも何も、写真だけ送りつけられても診断できん。とりあえず、今から遺体の俺が指示する場所を写してみせろ』
シュラ、と呼ばれた男は、論文が山ほど散らばった部屋の机で、サンドイッチを齧りながらそうアイオロスに告げた。
シュラ・アルフォードはアイオロスと同じインターナショナル・スクールの出身だ。在学時から切れすぎる頭脳と鋭すぎる三白眼のお陰で、あまり友人と呼べる人間はいなかったが、何故かアイオロスとは切れずに続いている。卒業後医学部に進み、大学病院の病理学研究医となった。今度は切れすぎるメスを右手に、病変組織を切り刻んでいるわけだ。
死体の写真を見ながら昼食とは、こいつもいい趣味してやがるな。
昼飯時に一方的に写真を送りつけた身勝手は棚にあげて、アイオロスは一人ごちた。勿論、iPhoneのマイクは十分体から離してある。

シュラは眼球や瞼の裏、口の中、脇の下、といった部位をアイオロスに指示すると、「直接見ないと確かなことは言えないが」と断って続けた。

『軽度の黄疸がみられるようだ。溶血性貧血の可能性は高いが、ベッドの中で死んでいたならともかく、直前まで自分の家の庭を歩いていたのに、突然倒れて死ぬほど症状が進んでいたとは考えにくい。重度の貧血に陥れば、動くのも億劫になって寝ているのが普通だ……直接の死因は別にあるのではないか?』

「たとえば――大量の失血とか?」

「画像だけでそこまで分かるか。あとはそっちの専門医に聞け。そもそも、その程度のこと、現場の監察医でもすぐに分かるはずだろうが……」

「それが、監察医の到着まで待っていられなくてな。これから、四人目の被害者へ聞き込みだ」

「四人目? それは、今そこで倒れている男じゃないのか?」

シュラは極端に表情の乏しい男だが、それでも、FaceTime の画面の向こうで、僅かに眉根が寄ったのが見えた。どんなニュースでも、この無愛想な顔を多少なりと動かす事ができれば気分がいい。アイオロスは、今頃ようやく報道規制が解かれて、メディアが大わらわで報道準備をしているであろうニュースを伝えた。

「コイツは五人目。四人目は十六才の少年だ。昨夜一人で留守番中に何者かに襲われたが、親が予定を変更して早くに戻ってきたため一命を取り留めた。重度の貧血で病院に運ばれ、手当を受けていたが、ついさっき目を覚ましたそうだ。――なんでも、これがまた見事なホワイトブロンドなんだと」

二　吸血鬼

「ラダさーん、部長が呼んでますよー!」

暢気な部下の声が、コンピュータに張り付いていたランディ・ブライトンの名を呼んだ。彼のペンネームはラダ・ブライトンなので、会社では誰もがそのように呼ぶ。……いや、今では、古い友人までそのように呼んでいるが……。

ラダは億劫な素振りを隠しもせず、部長のデスクまで歩み寄った。

「なんですか部長。俺は今、忙しいんですがね……」

「忙しいって君ね、どうせまた吸血鬼伝説でしょ? 何度も言うけどね、うちは文芸出版部。今巷を騒がせてる吸血鬼事件は、雑誌部の担当。ところで、一件持ち込みの連絡があったんだけど、君適当に相手して追い払ってくれる? 三時に来るってさ」

「は? なんで俺が……」

「一番ヒマそうだから。困るんだよね。上がカッコつけて、うちは持ち込みも無下に追い返しはしない、とか言っちゃうから、素人がすっかりその気になっちゃって。エージェントも通さないで来るんだから、どうせ箸にも棒にもかからないに違いないよ」

「そういうこと、雑誌部から回されてきたばかりの俺にやらせるんですか?」

「書評やってたんだから、目は確かでしょーが。君が紙面で遠慮なくやら

かしてたのと同じことを言ってやれば、大概の人間は大人しく引き下がるよ」

ラダは、はあ、と溜息をついて、壁の時計を見上げた。午後二時半。残り三十分では担当の作家先生に連絡もできないので、それまでは自由時間だ、と勝手に決めた。

机の上には、数枚のコピー用紙が散らばっている。雑誌の社会部に渡そうかと思ってコピーしたが、みすみす他人にネタを渡してやるのも惜しくて、結局まだ手元にあるものだ。

畜生。まだ雑誌部にいれば、俺が記事を書く機会もあったものを……。

間の悪いことに、ラダは二ヶ月前にこの中堅出版社の雑誌部から文芸出版部に配属替えになったばかりなのだった。その直後の吸血鬼事件。最初にこの事件を取り上げたのは、大衆タブロイド誌の The Sun だったが、その記事を見た瞬間に、ラダはその記事の正しさを直感した。

The Sun のオカルト記事をまともに信じるなど、仮にもオックスフォードで学位を得た人間のする事ではない、と、まあ普通の人間なら思うだろう。

しかし、ラダの手元にはこのコピー用紙があった。正確には、このコピーの元となった、ブライトン家に伝わる百年前の文献だ。

ラダの曾祖父の手によるものと伝えられるその手帳には、吸血鬼にまつわる一文があった。

吸血鬼の牙は、犬歯の位置にはなく、第二小臼歯の内側に臼歯の影に隠れて重なって生えている。

吸血鬼は、これを人間に見せないようにする術を心得ている。決して大きく口を開けて笑わないため、生涯吸血鬼であることを悟られずに死ぬ者も多い。

十字架、ニンニクは効かない。太陽を浴びても灰にならない。だが不死身ではなく、致命傷を負えば死ぬし、普通に年をとって死ぬ。

彼等は小さな部族に別れて存在し、それぞれの部族は一番強い力を持つ長に率いられている。そして、これらの部族を束ねる王が存在するが、その姿を見た者はない。

吸血鬼の王について、知られているのは、王が記したと言われるただ一篇の詩の一部のみである。

静寂　それは少し疲れた消え残る声
わが静寂の貴婦人は　いとも優しく歩を運び
鏡の内に　その顔養の白百合を摘む……

巷に溢れる吸血鬼像とは、大分異なった印象の記述だ。第一、この文章からは、吸血鬼にまつわるおどろおどろしさが全く感じられない。

大体、吸血鬼のトレードマークとも言うべきあの牙が見えずに、奥にコッソリ生えていて、当人もそれを気にして大口開けて笑えない、などというのは、迫力に欠けること甚だしい。

ウサギじゃあるまいし、吸血鬼も、歯が二枚重なって生えているというのは恥ずかしいのだろうか。

最後に添えられたフランス語の「王の詩」も、やたら少女趣味というか、

かなりロマンチストな印象だ。
この吸血鬼に関する記述、曾祖父の創作と言ってしまえばそれまでの話だが、手帳のそれ以外の記述が正確に当時の世情を反映しているのが気になる。更にいえば、己自身も含め、ブライトン家の男子にそのようなファンタジックな想像力があるか、という点に関して、ラダの意見はかなり否定的だった。
曾祖父はラダが生まれる前に他界したが、父も、祖父も、文学が好きで一度は文筆家を志したものの、あまりの才能のなさに絶望して別の職業を選んだからだ。
百年前といえば既に二十世紀初頭だ。既にファンタジーの世界の住人であったに違いない吸血鬼の口の中を、わざわざ開けて覗いた者がいるのだろうか？

気乗りしない気分を抱えて、予約しておいた応接室に行くと、その原稿持ち込みの客はまだ現れていなかった。
素人の持ち込みのくせに、時間に遅れるとはいい度胸だ、と腹の内で毒づいて、時計を見上げると、午後三時を二分回ったところだった。
流石にこれで痺れを切らせて帰るのは大人気ないので、三時五分まで待ってやろう、と決めたとき、その珍客は現れた。
「いや、助かった！　どこへ持っていっても、こっちの話聞くどころか、会ってもくれなくてさ！　あんた、いい人だな！」
殆ど白に近い金の長髪に空色の瞳、と、絵本から抜け出てきたような王子様顔の青年は、名前を「カノン」とだけ名乗り、扉の前で固まっているラダにそうまくしたてた。ラダが紳士的に差し出した手も、きっぱり無視してラダの肩をばんばんと叩く始末だ。
年は、二十才前半くらいか。見た感じでいえば、ラダよりも一回りほど若そうだった。
「いやー良かった！　これで漸く家に帰れる！」
「いや、ちょっと待って……。採用するかどうかは見てからでないと」
少しはこっちの空気も読め、と念力を込めて、ラダはわざと盛大に溜息をついた。
時間の無駄、決定。
社会人のマナーも知らない良家のボンボン（かどうかは分からないが、砕けた口調の割に発音は綺麗だし、身なりも悪くないし、多分そうなんだろう）に、その若さで一体どんな人間の心を打つ物語が書けるというのだ？
……いや、決して、自分がその年齢の頃に小説家を目指して挫折したからといって、さもしい僻み根性で言っているわけではない。
「君、持ち込みは初めて？　そういう場合は、直接来るんじゃなくて、エージェントを通した方がいいよ？　君はまだ自分で持ってきたからいいけど、中にはいきなり原稿送りつけてくるとか、メールで巨大な添付ファイル送って来る新人もいて、そういうのはまず目を通さずにゴミ箱行きになるから。――じゃ、原稿見せて下さい。その間に、そのシートに名前と連絡先書いて」
そういえば自己紹介どころか相手のフルネームも聞いていない、とラダは思ったが、どうせ没にするのだからいいか、と懐の名刺にも手をつけず、机の上で両手を組んだ。
と、カノンが出してきたのは、端の折れた四つ折りのコピー用紙一枚。

カノンは、先刻の軽い表情とは打って変わって、神妙にその紙片をラダの方に押しやった。
「……？」
「全部はまだ見せられない。とりあえず、一部だけ」
「はあ?!」
胸の内で呟いたつもりが、しっかり声に出ていた。超売れっ子作家の大先生ならともかく、素人の持ち込みでまだ完成してないとはどういうことだ?!
「……君、我々もヒマじゃないんだよ。完成してもいない小説をいきなり出版しろというのは、いくらなんでも無茶が過ぎるだろう」
「小説じゃない。詩だ」
「詩？」
「それも、これは特別な詩なんだ。いいから、とにかくその紙を見てみてくれ」
ああ、こいつはもう、今時の若者どころじゃなくて、宇宙から何かを受信して自分は使命を負っている、とか思い込んでいる電波君かもしれない……。
今日何度目かわからない徒労感に襲われながら、ラダは渋々その紙片を開き――そして、その文面に釘付けになった。
タイトルは、「Du Silence」となっていた。

静寂　それは少し疲れた消え残る声
わが静寂の貴婦人は　いとも優しく歩を運び
鏡の内に　その顔養（かんばせ）の白百合を摘む
病の癒える兆（きざし）は見えて　遙か彼方に目をやれば
木々　行人　橋のいくつかの　ひと筋の川
その水面を行く　光る大きな雲の群れ
生の懶惰か　ふと不興の念にとらわれて
――臥せってより　ひときわ感じやすいので――
なお病むひとは半ばくずおれ
「音は私に耐えがたい　十字格子の窓をしめて」と

どくん、どくん、と、全身の血が巡る音が、確かに聞こえた、と思う。
手元をみると、紙片を握った手は、みっともなく震えていた。
「……君……これをどこで……」
「どこで、って？」
「これは、君の作品ではない……そうだろう？　君はこの作者の曾孫かなにかか？」
「まあ、俺の作品ってわけでもないけど、曾孫じゃないぜ。俺の兄貴の詩だ。ちょっと訳ありなんで、これ一枚持ち出すのだって、大変だったんだ」
だから、なんとしても、今回はどっかで出版の手はずをつけて帰らないと、と続けるのを、ラダは大きく首をふり、ほとんど強引に遮って言った。
「だったら、それは盗作だ。俺は、この詩を、俺のひいじいさんの手記で見た。百年以上前に、すくなくともこの詩の最初の三行は書かれている……いいか、詩の善し悪しに関係ない。盗作、改作は、うちからは出版しない。だが、俺は、この詩の出所に興味がある」

その時だった。ラダは、なにか本能的な危険を感じて、紙面に向けていた顔をはっと上げた。
目の前に、鋭く煌めく青い瞳があった。先刻、自分よりも一回り若い、と思ったのは、目の錯覚だったのか。
その底知れない深さに心を奪われた途端、ラダは金縛りに遭ったように動けなくなった。
『ように』？
とんでもない。現実に、指一本動かず、声も出せないではないか！
「へえ……」
カノンは口元に危険な笑みを閃かせ、奇妙に優しい声で言った。
「うちの兄貴を侮辱する奴は、必ず痛い目を見せてやる、と決めてるんだが……お前、なんか妙な事知ってるみたいだな。どれ」
カノンは、椅子を立ってラダの隣へ行くと、細長い綺麗な指をラダの首にかけ、仰向かせた。
ぞっとするような冷たい指の感触に、ラダは背筋を震わせた。
これは……やばい。何故かと言われても知らないが、本能で分かる。この男は、危険だ――
「……待て……俺は……茶髪だぞ……」
「……はあ？」
「お前……まさか……吸血鬼の王……」
カノンの手が止まった。その隙に逃れようとラダは焦ったが、体はまだぴくりとも動かない。
カノンは、ふむ、と呟くと、いきなりラダの顎に手をかけ、鼻をつまんで無理矢理口を大きく開かせた。
「ふががががぁ――!!」
「――あ、なんだ、牙ないのか」
カノンが手を離した途端、金縛りがとけた。ラダは椅子を蹴倒し、十フィート近く飛び退って叫んだ。
「何をする!!」
「あー、悪い悪い、妙な事言うから、危ない奴かと思った。最近ロンドンは吸血鬼がいるっていうし？　俺、田舎者だから、用心しないと」
「危ない奴はどっちだ!!」
叫んでしまってから、『英国紳士たるもの、いかなる事態にもみっともなく声を荒げてはならない』という祖父の教えが脳裏をリフレインして、ラダは大きく深呼吸した。
いかんいかん。落ち着け。
よくよく考えてみれば、馬鹿げた話ではないか。このいかにも世間に揉まれていない感じの若者が、今巷を騒がせている吸血鬼だなどと……。
「カノン、だったか……。どうやら、君は吸血鬼について何か知っているらしいな」
「？」
「君は先刻、『ロンドンには吸血鬼がいる』と言った。メディアでは吸血鬼だ何だと騒がれていても、警察の発表ではあれは連続殺人かも知れない、という話にすぎない。この二十一世紀の世の中で、あれが本当に吸血鬼の仕業だと信じる奴はいないだろう……なにかしら確証がなければ」
「……でも、アンタも信じてるんだろ？」
「それは――」
今迄半信半疑だったが、お前のせいで一瞬本気で信じかけた、とは言わ

ずに、ラダは「仕事の話をしよう」と言った。
「……本題に戻ろう。この詩集を世に出したかったら、まず、君は本当のことを明かすべきだ。さっきも言ったように、うちの先祖が百年前に残した日記に、この詩の冒頭三行が書かれている。日記によれば、それは、部族に別れて生きる吸血鬼達を束ねる王が書き残したものだ、ということだ。君はどうみても二十代、とても百年も生きているとは思えない。……本当は、この詩をどこで手に入れた?」
カノンはうーん、と唸ると、いきなりガリガリと頭を掻きむしって呟いた。
「……あーもー面倒くせえ。もうコイツの記憶全部消しちゃおうかな……でもそれじゃ、この詩の出版のアテがなくなるし……三十社も断られて、もういい加減疲れてきたしなー」
「記憶を消す?! なんだそれは……」
「……その吸血鬼の王ってやつ。うちの兄貴なんだよ」

「面会謝絶?! どういうことだ、さっき面会許可が下りたからわざわざやってきたってのに……!」
ロンドン、セント・トーマス病院。
四件目の被害者の少年マイケル・キースに話をきこうと病院を訪れたアイオロスは、背丈は自分の三分の二ほど、横幅は軽く二倍ある看護婦に足止めされた。
正確に言えば、アイオロスとその後について病院側のバリケードを破り、なんとかニュースを得ようとしているメディアの人間を、だが……。

「さっきが良くても今はダメってことは、病院じゃ日常茶飯事だわよ! さあ、さっさと外に出てちょうだい。あんたたちがここに居座ってちゃ、邪魔でしょうがないったら」
「待て、それはつまり、急に容態が悪化したってことか? 今朝の時点では普通に会話が出来るレベルに回復したと聞いたんだ。それとも、何か他に理由が――」
「さあね、あたしの担当じゃないし、そこまで知らないわよ。でもさっき内科部長が緊張した面持ちで部屋に入っていったし、人の出入りも急に慌ただしくなったからね。なんかあったんじゃないの?」
ざわり、とアイオロスの背後の記者達がざわめいた。容態急変、という単語がさざ波のように伝わり、記者達が一斉に携帯をとって連絡を始めた。無性にむかついて、アイオロスは自分のすぐ後ろで声を上げていた大手タブロイド紙記者の手から電話を抜き取り、電源ボタンを長押しした。
「なにしやがる!」
無論、記者は喚いた。
「相手は十六才の子供だろうが! 下世話な記事書くんじゃねえぞコラ。お前らの息子や妹やらが同じ目に遭って、てめーらの稼ぎのエサにされてると思ったらどんな気分だ?!」
「ぬかせ、警察が最初からもっと情報公開してりゃ、市民は自衛して、こんなに被害者が出ることもなかっただろうが! 言っとくがな、ロンドン市民は今あんたらよりよほど情報を欲しがってるんだ。警察は未だに病死だとかなんとかいって、あてにならないからな!」
痛いところを突かれて、アイオロスは言葉に詰まった。
確かに、警察の最上層部の人間は、未だにこの問題をあまり深刻に捉え

ていない。マイケル・キースに関しては、少年が「誰かに襲われた」とはっきり証言したので事件性をみとめたが、それ以外は病死の可能性もあるとの立場を崩していないのだ。

子供を持つ親からすれば、「吸血鬼」に噛まれても処置が早ければ助かるのか、それとも結局死ぬのか、たしかにそれは気になって仕方がない情報には違いない。

アイオロスは渋々携帯を記者に返し、記者の一団を病院の入口の外まで押し出して、病院の壁にもたれかかった。

とにかく、今は少年の回復を待つしかない。口には出さなかったが、この事件の唯一の生存者であるマイケル・キースに誰よりも話を聞きたかったのは、アイオロス本人だった。

十三年前のあの時――。

付き合い初めてたった三ヶ月だった恋人のエマも、自分が早くに異変に気づいてさえいれば、あるいは一命をとりとめたのではなかったか、と。

一方、ウェスト・ロンドン出版社応接室では、ラダがカノンを凝視したまま固まっていた。

なんか、今、心のどこかで期待していたような、一方で、そんなアホな、と思い続けてきたようなことを、さらりと当然のように言われなかったか？

「……君の、兄が、現代の王？　吸血鬼の？」

「現代の、って言われても……。ここ三百年そうだがな」

「三百年?!　吸血鬼は年もとるって……!!」

「とるよ？　でも、個人差があるんだよ。俺たちはかなり長生きな方だ」

多分、ここは、ひっくり返って驚く（あるいは恐怖する）ところなんだろう、とラダは思ったが、何故かそのような感情はなにひとつ浮かんでこず、代わりに、抑え難い高揚感がラダを支配した。

「……君の兄が吸血鬼なら、つまり、君も、吸血鬼だと……」

先刻、一瞬見たカノンの底知れない印象は、正しかったわけだ。一回り若いなどというのはとんでもない話で、実は三百年も生きてきたわけだから。

カノンは、机の上に腰掛けると面白そうにラダを眺めて、皿に積んであったクッキーの欠片をひとつ口に放り込んだ。

「ま、人間と何ひとつ変わらないけどな。……長生きしてるってだけで。俺なんか、牙すら生えてないし」

「……そんなものも、食べるんだな。……血は、吸わないのか？」

ラダの質問は、「吸血鬼」相手には至極まっとうな質問だった。いや、むしろ、そんな事を聞く事自体がナンセンスだといえば、決して「まっとう」ではないのだが。

しかし、カノンは再びクッキーに延ばした手を止めてラダを凝視し、次の瞬間には腹を抱えて笑い出した。

「……ばっかみてえ……俺だって、あんたみたいなマズそうなのはいらないよ！」

「やっぱり、血を吸うなら若い女に限る、か？」

「違うよ。……あんた、出版社にいる割には、想像が型にはまりすぎてないか？　そんなんで編集とか勤まるのかよ？」

ぐっ、と詰まって、ラダは上目遣いにカノンを睨んだ。

「……編集は、作家の想像力を邪魔せず、かつ読者からの視線で作家の想像の翼があまり遠くまでいってしまわないように見張るのが仕事だから、これでいいんだ。……で、牙がない吸血鬼がいるのか？」
「いるよ？」
　カノンはラダを振り返り、悪戯を仕掛けた子供のように笑った。
「今、俺の、目の前に。」
「……はあ?!」
「あんたの祖先とやら？　そんなに詳しく吸血鬼のことを知ってるんだから、自分もそうだったんだろうよ。血が薄まって、あんたには牙が生えていないが……、一度吸血鬼の血が混じったら、もう人間とまったく同じにはなれないのさ。……まあ、だからって悲観することはない。あんただって、いままで普通に人間として暮らしてきただろ？」
「そんな……ばかな……」
「吸血鬼――俺たちはVespire（ヴェスパイア）と呼ぶが――が血吸って生きてるとか、そんなの人間が勝手に作ったオカルトだっつーの。噛むのは生殖行動の時だけだ。ヴェスパイアの女はその刺激で排卵するからな」
「でも、今巷を騒がせてる吸血鬼は男ばかり襲ってるじゃないか！　被害者は皆重度の貧血で死んでるぞ！　十六才の少年被害者は、なんとか一命をとりとめたが……」
「あー、それ、別の理由だから」
「別の理由？」
　カノンは、急に面倒臭そうな顔になって、天井を仰いだ。
「たまに、先祖帰りする奴がいるんだよな。で、そいつが人間が勝手に造り上げた吸血鬼像に毒されて、これこそ自分の真の姿、とか勘違いしちまうから、手に負えないんだよ。折角俺たちは平和に生きてるのに、いい迷惑だぜほんと」
　棚からボタモチ。
　以前日本の新聞社に勤めていた友人のミーノスが、そんな日本語を教えてくれたが、まさにこれこそその状態ではないだろうか。
　まあ、どこまで信用していい話やら、という問題はあるが、ネタだとしても、読者が食らいつく話には違いない。
　あまりにカノンの話に興奮していたので、ラダはついカノンが持って来た紙片をひっくり返し、裏に今きいた話のメモを書きとめた。
「おいおい！　その紙に書くな！　大事な詩なんだから！……まあ、複製だけどな」
「あ、すまん、つい……」
　カノンはラダを睨み、紙片を自分の手に取り返して言った。
「……なんか、『特ダネ掴んだ』って顔に滅茶苦茶書いてあるけどさ、アンタはこれ以上知らない方がいいと思うぜ？　これからも人間のフリして生きていきたいだろ？　だったら――そのカビが生えた先祖だかの日記とか、俺が今喋ったこととか、全部忘れちまいな。――で、この詩、買う気あるのかよ？　……あ、俺のオリジナルじゃなかったら出せないんだっけか」
　いらねえんなら、別あたるから、とさっさと応接室を出ていこうとしたカノンに、ラダは慌てた。
　冗談ではない。折角のニュースソースを、逃してなるものか。
「ま、待て!!」
　立ってカノンの腕を掴んだつもりが、足がもつれた。視界が九十度傾き、

派手に椅子が倒れたが、ラダは必死で手を伸ばし、目の前にあったものをはっしと掴んだ。
　カノンが嫌そうな顔をして振り返る。足首に、ラダの手が絡み付いていたからだ。
「わかった、その詩の出版は、俺がなんとかする！　だから、何処にも持っていくな!!」
　一瞬、周囲の音が止んでシーンと静まり返った。応接室は簡単に事務所の一角をパネルで仕切っただけのものだから、声が外に漏れて外の編集員に聞こえてしまったのだ。
　……ああ、やばい……部長に怒られる……
　ボツにしろ、と言われていたのに。
　その時、応接室の外の通路を、雑誌社会部の記者が興奮して喋りながら過ぎ去っていった。
　そして、この偶然が、その後のラダの人生を大きく変えるきっかけとなってしまったのだ。
「例の連続殺人は病原菌由来かもしれんぞ！　四人目の被害者の容態が急激に悪化したらしい！　輸血して一度は持ち直した筈なのに、また重度の貧血だそうだ！」
　カノンが、弾かれたように声のする方を振り返った。
　ラダが見上げると、カノンの顔つきは一変して鋭く引き締まり、人の姿の見えない窓の向こうをじっと睨んでいた。
「……四人目の犠牲者って、たしかまだ十六才だったよな？」
「あ？　ああ……」
「入院してる病院、分かるか」
「先刻ニュースで写ってた病院なら、場所は知っているが……」
「すぐにそこに俺を連れて行け。……発症したばかりなら、今ならまだ間に合うかもしれない」

三　兄と弟

「随分ご無沙汰だなあ？　法学部出奔して文学に転向した途端、親から勘当されてその日のパンにも困ってたお前を助けてやったこの俺に隠し事たあ、随分気の効いた真似してくれるじゃねえか？」
「よく言う……!!　その助けた奴のなけなしの初バイト料、全部競馬につぎ込んですっちまいやがったのはどこのどいつだ！　……ってか、別に隠してないぞ！」
「じゃあなんだよ、あのワケあり気な銀髪の兄ちゃんは」
「うちの客だ。今日原稿を持ち込んできたんだよ。俺だってよく知らん。なんだか、被害者の少年の容態が悪化したって聞いた途端、すぐにそこに連れて行けというから……」
「ちょっとそこ！　廊下では大声で喋らないように！」
　通りかかった看護婦に睨まれて、身長一九〇センチを超える二人の大男は揃って肩をすくめた。四人目の被害者、マイケル・キースが入院しているセント・トーマス病院までカノンを連れて来たラダは、そこで大学時代のルームメイトだった刑事のアイオロスに出会い、その場で色々と尋問を受ける羽目になったのだ。

カノンは、真っ先に少年の担当医に向かって自分なら彼を助けられる、と告げ、そのまま少年の病室に閉じこもって出て来ない。
勿論ラダとアイオロスも病室に入ろうとしたのだが、医師に「患者が重体なので、関係者以外立ち入り禁止」としかめ面で追い出されてしまったのだった。
「……ったく……洒落になんねえな。これでマイクが助からなかったら、五人目の被害者だぞ？　ヤードの面目丸つぶれだ」
「そのヤードの上官の面目は跨いで歩くお前が何を言うか。弟が嘆いていたぞ？　なにかと上の意向を無視するから出世しないと」
アイオロスはラダをじろりと睨むと、むっつりと黙ったまま煙草を胸ポケットから取り出して口に咥えた。病院の中は勿論禁煙だ。ラダが濃い眉をひそめた。
「おい、やめとけよ」
「吸わんよ。ニコチンはパッチで摂取中。健気なもんだろが？　せめて枯草の香りくらい嗅がせてくれ」
「いっそ嗅ぎ煙草にしたらどうだ？」
「嫌だね、じじくせー。……で、お前最近アイオリアに会ったのか」
アイオリアは、アイオロスの七才年下の弟で、ロンドン警視庁ではなくシティ・オブ・ロンドンを管轄するロンドン市警の刑事だ。兄のアイオロスが周囲の期待も何もそっちのけで好き勝手やり放題だった事のあおりを食らって、弟は至極真面目に育ち、親の期待通りロンドン大学を優秀な成績で卒業し、早々に安定した収入を得て既に妻と子もいる。
もっとも、親はもっと危険の少ない職業を、と期待していたものが、それだけは兄の影響か同じ警察に所属することになってしまったが……
「会ったのか、って、リアと俺はＦＢ友達だよ」
ラダが言うと、アイオロスは露骨に嫌そうな顔をした。
「Facebookかよ……アレ、こっちの個人情報だだ漏れじゃねえか。あの野郎、警察のくせしてＳＮＳなんかやってんのか？」
「流石に仕事の話は一切ないけどな。いいんじゃないか？　奥さんの愛妻弁当の写真上げるくらい」
「なんじゃそりゃ……子供の写真はないのか？」
「流石にそれはやってない。職業柄、子供の顔が割れると逆恨みで危険なこともあるからということらしい。というより、むしろリアは、ＦＢを情報収集に使っているようだ。そのへん、ネットの情報はハナから当てにしないお前とは対照的だな？」
「メディアなんざ嘘ばっかり、というのは俺が一番良く知ってるからな。まったくウラがとれないタレコミの山を相手にするヒマはないね」
「そう面と向かって言われちゃ、業界の人間としては耳が痛いが、否定はせんよ。……あの時も、そうだったしな」
ラダが低くそう呟くのを、アイオロスは黙って聞いた。
アイオロスが、大学を卒業後十数年が過ぎても、未だにルームメイトのラダとそれなりに付き合いがあるのは、二人の間にとある共通の経験があるからだ。
法学部で、弁護士を目指して勉強していた時間。
先にラダが、本来やりたかった文学に転向したため仕送りを止められ、アイオロスのアパートに転がり込んで来た。そして、その文学部で知り合った二才年下のエマ・ハトソンをアイオロスに会わせ――エマはアイオロスに一目惚れした。

法学部の課題は厳しい。一週間に、分厚い専門書を三十冊も読破しなくてはならない。

既に最終学年に入っていたアイオロスは、恋に燃えた夏が終わると、あまりエマと過ごす時間がとれなくなった。それでも、エマは毎日のように、夜遅くまで勉強しているアイオロスのために夕食を作って届けにきた。当然、同室のラダもその相伴に預かることになり、レポートのために机に齧り付くアイオロスを横目に見ながら、二人で食後の紅茶を飲んだりもした。

十一月に入り、オックスフォードにも冷え込みの厳しい朝晩が増えた。エマが電話ごしに風邪声で、体調が悪いので今日は行けない、と連絡してきたとき、アイオロスは「薬を持っていくから、大人しく寝ているように」と伝えた。しかし、そう口にしながら、頭の中では来週から始まる中間試験のことを考えていた。

エマには、そんなアイオロスの心が聞こえていたのかも知れない。「大したことはないから、ロスは自分の勉強をして、私のことは気にしないで」と、電話の向こうで笑った。

それから続く二週間、結局アイオロスは、試験の準備に追われてエマに電話すらしなかった。落第してエマに格好悪い所を見られたくない、という見栄が邪魔して、エマが大変なことになっているかも知れない、というところまで気が回らなかったのだ。

ラダが、二度、「彼女に電話くらいしたらどうだ」と口を挟み、苛ついていたアイオロスと軽く口論になった。恋以前の感情が形になる前に、エマがアイオロスを選ぶのをその目で見てしまったラダは、その鬱屈もあって、結局ラダ自身もエマに電話も入れなかった。

そして、試験の最終日――二人は、エマが自室で亡くなっていたことを聞かされたのだ。

死因は、溶血性貧血。マイコプラズマ感染による肺炎の合併症であったと診断された。

……たしかに、エマは肺炎を煩っていたのかも知れない。

しかし、ならば、その白い首筋にくっきり残る二つの傷跡は、一体なんなのか？

そもそも、看護学校に親友もいたエマが、何故そんなに悪化するまで誰にも相談しなかったのか？

二人は医師や警察に食い下がり、傷害もしくは殺人事件の可能性はないのかと何度も尋ねたが、結局最後まで両者とも最初の見解を曲げることはなかった。

そこで、二人はこの話を新聞に売ったのだ――これがもし事件であるならば、かならずこのイギリス国内のどこかに似た犯罪が病死として片付けられたケースがあるはずだ、と。

上機嫌で二人の話に相槌を打って帰っていった新聞記者の記事を紙面で見た時、アイオロスは己の目を疑った。

『オックスフォードの学生、肺炎から貧血を併発』と見出しのついた記事には、一度は子供と老人の病気となった肺炎が、最近若者にも広まりつつあること、合併症で重度の貧血に陥ることもあるため、早めに病院で受診することを啓蒙する文章で埋め尽くされ、アイオロスが渡した写真も、首筋に傷があったことすら書かれていなかったからだ。

立て付けの悪い扉を無理矢理開ける音がして、カノンが随分と疲れた様

子で病室から出てきた。
腕に採血された痕があり、頬は血の気を失って透き通るように白い。相当量の血液を少年の治療のために提供したものらしい。
「大丈夫か？　随分と顔色が悪いが……　キース少年はどうなった？」
思わずラダが立ち上がってカノンの肩を支えると、カノンは面倒臭そうに病室の扉を顎でしゃくって続けた。
「眠い……。あの子供が助かるかどうかは、あとは体力勝負だな。まあ、特に持病もなかったようだし、多分大丈夫だろ」
「中で何があった？　血液を提供したのか」
カノンはうるさそうにゆるゆると首を振り、それには答えずに続けた。
「それから、あの子供は暫くは面会謝絶だ。あんたら、ここで待っててもらって話は聞けないから、今日はとっとと引き上げるんだな。じゃ」
「じゃ、って、ちょっと待った！　一体何があったんだ？　君は何故ここに来る必要が――」
「しつこいな。これ以上は知らない方がいい、って言っただろ？」
「しかし、これは今ロンドンを騒がせている連続殺人事件に関わる問題じゃないか！　君は何かこの件について知っているのか?!」
「ノーコメント。あ、出版の件については、さっき渡した紙の下に書いてある電話番号に、また後日連絡くれ」
カノンはラダの腕を無理矢理振りほどくと、よろめく足取りで病院の外へと向かった。
と、その時、病院の廊下に響き渡る音量で、ドン、と壁が鳴った。
カノンの目の前に、長いスラックスの足が通せんぼをして壁を蹴り付けている。
「はーいストップ。警察への協力は市民の義務でーす。ちょっと、ヤードまできてもらおうかね？」
「……なんだ？　あんた」
「見ての通り、刑事ですよ？　しかも、お前さんが今何かやらかしてきた少年の事件担当。さて、中で何をやってきたか、洗いざらい吐いてもらおうか？」
カノンは身長一八八センチ、それなりに長身の部類に入るが、この刑事と名乗った男はそれより更に十センチほど上背があって、しかもごつくはないがやたら手足が長い。
こういう人間を相手に逃亡を計っても大抵は掴まるものであるし、現在貧血気味で逃げても逃げ果せる自信がないカノンは、はあ、と深い溜め息をついて言った。
「……めんどくさ……こいつの記憶も消しちまおうか……」
「何？」
「……ああ、彼なんかちょっと変わってるんだ。ほら、一応詩人だし」
アイオロスがキレると大変怖いことになることを知っているラダは、殆ど反射でカノンとアイオロスの間に割って入り、カノンを背後に庇った。
アイオロスにしてみれば、漸く手に入れた連続殺人の手がかりだ。多少恫喝して、まあ、上に黙ってちょっとくらい痛い目見させるくらいのことは、やりかねない。
「詩人？　――ああ、それで、お前の客ね。どっかのロックバンドの兄ちゃんかと思ったぜ。ロン毛だわ、社会人の対応ってもんがなってないわ……」
それを言うなら、善良な市民の行く先を病院の壁を蹴って通せんぼする

お前の方がよほど反社会的だろう、とラダは思ったが、口にする勇気はなかった。
「……でも、俺、記憶操作イマイチ下手なんだよな……あいつは完璧にやるんだが……」
「何を訳のわからんことをブツブツ言っとるの。あのさ、お前さんが黙秘っても、中の医者に聞けば分かる事なんだけど？　詩人でも自称ミュージシャンでも俺は一向に構わんから、とにかく手間かけさせんでくれる？」
「なんでミュージシャンなんだよ、俺が」
「そりゃ、ロン毛で色抜いてるったら、それしかないだろう！」
「これは地毛だ‼　……ってか、仮にも刑事が、そんなチープな偏見まみれってどうなんだよ？」
「何を言うか。刑事から偏見を取り上げたら何も残らんだろうが。怪しいと感じたら即疑え、これ捜査の初歩だ」
「俺が怪しいのかよ‼　いっとくが、俺は犯人じゃない」
「ああ、そうだろうな、むしろお前は被害者の側だ」
にやり、とアイオロスが笑ったので、カノンは思わず寒気を感じて押し黙った。
口は綺麗な弧を描いているが、目が笑っていない。こういうのは、獰猛な肉食獣の笑い、というのだ。
「……言ってる事分かるか？　これまでの被害者のプロファイル。年齢、職業、勤務場所や交友関係――何一つ共通項がない。ただひとつ、全員が滅多に見ないようなホワイトブロンドで男だってこと以外はな。――お前は、今迄の被害者の中で、もっとも被害者らしい特徴を持つ人間だ。……というか、俺は今確信したね。一連の事件、お前さんを殺そうと思ってる誰かが犯人だ」
「はああ?!　俺がなんで……‼」
「だから警察としては、未来の被害者の命を守らねばならん。というわけで、今日からお前はヤードに寝泊まりだ。よかったな！　今は丁度、現代版シャーロックホームズのドラマが大ブレイクしたお陰で、全世界から若いねーちゃんがゴロゴロ見学にきてるぞ！」
「いらんわ、そんなもん‼　ってか、放せよ、コラ！」

夜のハックニーは、どろりとした濃い闇の匂いがする。
所狭しと古い集合住宅が立ち並んだ一角は、英国人が誇る庭園の緑の欠片も見当たらず、道に割られて捨てられた酒瓶からすえた匂いがたちのぼる。
昼間は今でこそ芸術家の町などともてはやされているが、夜の帳が下りればかつての危険な町の影が姿を表す。
アイオロスは、その生温い空気の中を、一人住まいのフラットに向かって歩いていた。
あの後、セント・トーマス病院から無理矢理カノンをスコットランド・ヤードに連れて行こうとしたアイオロスを必死でラダが止め、超特急でホテルの部屋を手配し、カノンはそこで一晩の休息をとることになった。大事な参考人が逃げないように、今晩はラダが同室で見張っているから、との約束で引き上げてきたが、部屋に着くなりベッドにダイブして三秒で夢の国に旅立ったカノンを、なんとも言えない表情で見下ろしていたラダを

思い出すと、自然と笑いがこみ上げてくる。
……あの堅物が、これまで浮いた噂のひとつもなかったのは、そういうことだったのかね。
ベットで羽布団に包まって寝息をたてていたカノンの横顔を思い出せば、たしかに睫毛は白くけぶるように長いし、顔立ちもかなり整っている。黙って寝息を立てていれば、多少へんな気を起こす奴も――いるかも知れない。
もっとも、ラダはあれで、骨の髄まで英国紳士だから、見張りの名目のもとにカノンに何かよからぬことを企んでいるわけでは決してないだろう。しかし、エマの死以来、焦点を結ぶ対象を失ってしまったかのようなあの金茶色の瞳が、あれほど熱心に誰かを見詰めているのを、アイオロスは見た事がなかった。
『今日読んだ文献にね、面白い話があったの。昔、西の民（ヴェスパー）と言われた部族があって、その一族は大変長寿だったんですって。今となっては、その「西」がどこを示すのかは分からないのだけれど、鋭い牙を持っていたと推測される記述があって……ヴェスパーがなまって、ヴァンパイアの語源になったという説があるそうよ』
最後に会ったとき、エマが楽しそうに語っていたのを思い出す。カノンが寝入った後、ラダは、慎重に言葉を選びつつ、言った。
『カノンは、自分はヴェスパイアだ、と言った。しかも、彼の兄は、三百年前からヴェスパイアの王だと……。ヴェスパイアとは、吸血鬼のようなものだが、そんなに血は吸わないらしい。……そして、多分俺も、その末裔なんだそうだ』
ヴェスパイア――ヴェスパーがヴェスパイアとなり、ヴァンパイアの語源になったのは、おそらくほぼ間違いないだろう。
アイオロスは、胸の内ポケットの中から小さな試験管を一本取り出し、月明かりに透かしてみた。中には、黒っぽく重い血液が入っている。
蓋をあけると、血液特有の鉄分の匂いが溢れてきた。カノンの血だ。
病院を出る前、アイオロスは病室から出てきた看護師に話しかけ、その隙に看護師がトレイに積んでいた血液サンプルの一本をくすねてきたのだ。
カノンの血液は、ほぼ間違いなく血清として使われた。何故断言出来ないかといえば、医師に尋ねてもまともな答えが返って来なかったからだ。
カノンは、「記憶を消しちまおうか」と言っていた。……ヴェスパイヤというのは、なにかしら人外の力を持つものらしい……。
そして、カノンはまた、自分の血に少年を救う力があることを知っていた。
……ならば、一連の犯行には、そのヴェスパイア一族が絡んでいるのだろうか？

雲間から、明るい満月が覗く夜だった。街灯の少ない路地でも、暗闇に慣れた目には隅々まで見えた。
それだというのに、その男は、まるで影の中から溶け出すように、雲の切れ目から月が現れるのと同時に、唐突にアイオロスの前に現れた。
金色の髪を肩の下まで延ばしたその男は、アイオロスの方に向き直ると、にっと口を三日月型に開けて笑った。
白い歯が闇の中にこぼれ、アイオロスは何故かぞっとして、カノンの血液を再び胸ポケットにしまうと、ポケットの中に右手を突っ込んだ。

イギリスでは、制服警官は拳銃を持たない。私服警官は任務中携帯を許されているが、アイオロス自身は上司に命令されない限り持ち歩かない主義だ。従って、ポケットの中に入っているものは、煙草を買う度に増える釣り銭だけだった。

「――やっと、みつけた。」

男がしわがれた声でそう呟き、アイオロスは間合いを計りながら、コインをたっぷり一掴み手のひらに握った。こちらのことを知っているのなら、刑事であることも知っているかも知れない。いや、むしろ、過去に自分が関わった事件の関係者だと考えた方が自然だろう。

アイオロスは退路を確かめつつ、周囲の気配を探った。どうやら相手は一人のようだ。

「……誰だ？　俺になんの用だ」

相手が拳銃を持ち出してきたら、走って横の車の影に隠れる。ナイフなら、体を低くして、足を払って横を走り抜ける。

治安のよくない地域で暮らして来たアイオロスは、それなりに危険に対する対処も心得ていた。しかし、男の次の行動は、アイオロスの予想をまったく違えたものだった。

男は信じられないような早さでアイオロスのとの距離を詰め、その両肩を掴み、何か匂いを嗅ぐ仕草をしたのだ。

咄嗟に、アイオロスは声を上げることも出来なかった。人間の動きではなかった。

「……なんと甘い……これが王の血の匂いか……」

うっとりと、男が囁いた。咄嗟に、アイオロスは懐に忍ばせたカノンの血液サンプルのことを言っているのだと気づいた。

ならば、この男は事件の関係者、もしくは容疑者そのものに違いない。

――それなら、問答無用で確保だ！

アイオロスの気が我が身の危険から逸れた時、男の背後の何処からか、鋭い声が上がった。

「その男から離れたまえ！　血を吸われるぞ！」

何故、咄嗟に飛び退くことが出来たのか。

アイオロスは、自分の体がその声に反応したことに驚いた。全ての行動が、予定されていたかのように――先の脳内シミュレーションにはなかった筋書が、流れるような一連の行動となってアイオロスを守った。

男から半歩飛び退り、それと同時に右手に握り込んでいたコインを男の顔面に叩き付ける。男が目を塞がれてひるんだ瞬間、アイオロスは全速力で声の方向へと走った。T字路の奥を見ると、ぼんやりと白い人影が手招きをしている。なんの疑問もなく、アイオロスはそこへ飛び込んだ。

飛び込んだ途端、アイオロスの体は白い人影に押さえ込まれ、壁に押し付けられた。思わず怒鳴り声を上げようとしたのを、その人物は肩を抱えてアイオロスの口を塞ぎ、「静かに！」と鋭く囁いた。

静かに、といったって、このあたりで横道はここだけだ。こんな場所で息を詰めていても、すぐに見つかるではないか。

しかし、だからといって、騒げばそれだけ早く見つかるだけだ。

身じろぎもせず息をつめていると、はたして、道の向こうに、金色の髪の男が現れた。

口を塞いでいる手に、わずかに力が籠もったのを感じた。

月は今雲に隠れている。しかし、何も障害物のない路地に、人がいることが分からないほどの暗闇でもない。

その時、アイオロスは信じられないものを見た。男は明らかにアイオロスの姿を探しているのに、一度もこの路地の方向を見ようとしないのだ。
まるで、路地など存在していないかのように……。
そして、ついに、金髪の男はアイオロスを探すことを諦め、元来た方向へと戻っていった。
アイオロスの体にかかっていた腕から力が抜け、ふうっとひとつ、隣から大きな溜息が聞こえた。
「……諦めたようだ」
そのとき、雲の切れめから再び月が現れ、白い光が周囲を明るくてらした。その中に浮かび上がった男の顔を見て、アイオロスは思わずあっと声を上げた。
月の光を集めたようなホワイトブロンドの髪。深い青の双瞳が、綺麗なアーモンド型に見開かれて、アイオロスをじっと見つめていた。
白い皮膚はまるで大理石のような硬質な光を弾き、その造詣は一寸の狂いもない精密機械のように整って、その中に薄い唇が緩く引き結ばれている。
人は、あまりに整った顔を見ると、感嘆を通り越して、気味悪さや恐怖を感じるという。
アイオロスが感じたのも、何か人外のものを見たような畏怖心だった。それでも、恐怖を感じなかったのは、その顔が先刻ホテルに置いてきたカノンとまったく同じであることに気がついたからだ。
「お前……どうやって……!」
「静かに！　声が大きい……」
男は、再びそう鋭く制し、周囲を見渡した。

「……君は私の双子の弟を知っているな。私はサガ。私の能力は、近くにいる人間の意識から一時的にある空間に関する情報を消してしまうことだが、声や派手な動きで過剰に相手の神経を刺激すれば、簡単に破られて相手の意識がこちらに向いてしまう。死にたくなかったら、安全な場所に移動するまで黙っていることだ」
「死にたくなかったら、って……」
「質問もあとにしろ」
そういうと、サガはアイオロスの手を握り、夜の町を歩き始めた。
それにしても、このサガは、弟のカノンとはまったく異なった印象を与える男だ。カノンは随分と表情豊かで、育ちのよさそうな良家の子息、といった感じだが、サガの方は触れれば切れるような研ぎ澄まされた刃物のような印象を与える。
カノンの兄がヴェスパイアの王だというなら、この男こそ、その王だということなのだろう。本来は、アイオロスのような下々の者が言葉を交わすことなど出来ない存在なのではないか。
アイオロスは英国に生まれたが、ずっとインターナショナルスクールで育った事もあり、あまり階級だの貴族の威信だのといったことに興味はない。だが、そんなアイオロスでもつい襟を正さずにはいられない空気が、たしかにサガにはあった。
しかし、そうやって権威に尻込みする自分自身は面白くないことこの上ない。
アイオロスは、サガに握られた手を大仰に振って言った。
「もう一つだけ。この手は何か意味があるのか？　大の男が二人仲良く手をつないで、ってのもどうかと思うんだが」

「隠すものには触れていた方が効果が高い。さあ、あとは黙って私をカノンのもとへ案内したまえ」

「サガ……！　なんでお前がここに……?!」
「その言葉をそっくり返そう、カノン。……どうして、あれを持ち出したりした？　しかもお前は、掟を破って、人間に血液を与えたな?」

アイオロスがカノンを軟禁しているホテルの部屋にサガを案内すると、サガは無言でカノンが寝ているベッドに歩み寄り、いきなり上掛けを剥ぎ取った。
窓辺でソファに腰掛けて船をこぎ始めていたラダは、突如現れた旋風に思わず飛び上がり、ベッドの上で目を擦っているカノンと、仁王立ちになってそれを睨みつけているサガとを見比べることしか出来なかった。
一卵性双生児?!
それとも、ヴェスパイアは全員同じ顔、とかあるのか?!
「だって……！　でないと、あの子供は助からなかっただろうが！」
「だからといって、何故お前が人間のために一肌脱いでやる必要がある?!医師は今頃、お前の血液を分析して、お前の行方を探しているだろう……お前は、再び人間のモルモットに成り下がりたいのか?!」
「医者の記憶はちゃんと消して来た！　それで問題ないだろう！」
夫婦喧嘩は犬も食わぬ、という言葉があるが、兄弟喧嘩だってそれにかなり近いものだ。

外部の人間には言っていることも分からないし、まあ憎み合っているのでなければ明日には元通りになっているだろう。
しかし、事件に関係があるやも知れぬ、となれば、傍観しているわけにもいかない。アイオロスは、わざと派手に咳払いをして、睨み合っている双子の間に割って入った。
「えーと。そのへんは後でじっくり話してもらうとして、まず最初からいこうか？　……あんたら、一体、何者?」
サガが、冷えた眼差しでアイオロスを睨んだ。
「部外者には関係のない話だ。黙っていて貰おう」
「そういうわけにはいかんね。お前さんはさっき、『質問はあとにしろ』と言った。今がその『あと』だ。勝手に人のモノを持ち出したり、言う事きかねえ弟にキレたい気持ちは非常によく分かるが、まあ弟なんてのは兄貴につっかかって反抗するのが仕事みたいなもんだからな。ここで叱ったところで何も変わらん。だったら、その時間、俺を納得させる説明に使え。なにしろ、次の被害者の命がかかってるからなぁ……いい加減なこと言うと、公務執行妨害でヤードのブタ箱にぶち込むぜ?」
カノンが目を丸くして、隣で立ち尽くしていたラダに耳打ちした。
「俺、警察とはここ数十年付き合いがなかったんだが……最近の警察は市民に対しこんなに横暴なのか?」
「……いや、そんなことは、多分ない、と思う……」
「うちの兄貴にここまで失礼な態度をとって無事だった奴は、はっきりいって居ないぞ？　大丈夫か？　あいつ」
えっ、とラダは焦り、旧友を振り返った。そういえば、相手は吸血鬼なのだ。飛びかかられて血でも吸われれば、連続殺人六人目の死体が出来上

がるかも知れない。
サガは、暫く我が身に向けられた経験のない侮辱に身を震わせていたようだったが、やがて大きく息をひとつ吐くと、この場の誰にも理解できない一言を吐いた。
「……君には、弟がいるのか？」
「？　ああ、いるよ？　七才年下のうるせー弟が」
「……そうか。」
サガは、しばらくじっと目を閉じて黙っていた。アイオロスが、コイツ、立ったまま眠ったんじゃなかろうな、と思い始めた頃、サガは再び瞳を開き、「よかろう」と言った。
「そうまで言うなら、説明してやろう。……諸君も楽にしたまえ」
サガはそう言うと、これまでラダが座っていた窓際のソファに腰掛けた。
……楽にしろったって、椅子はあんたが座ってるソファ一つだけなんだがね？
これだから王サマは、と内心手打ちしつつ、アイオロスは壁にもたれてポケットの手帳を取り出した。
「……私とカノンは、もともとはヴェスパーと呼ばれる一族の末裔だ。昔人間の村で、致死率ほぼ百パーセントの壊血ウィルスが発生した。このウィルスは空気感染しないが、なにしろ衛生概念のない時代のことだから、ウィルスはやがてじわじわと村中に広がっていった。一度感染すれば、一週間ほどで溶血が進み、死に至る。いくつもの村が、そうして壊滅していった。
ところが、ある時、数人の生存者が現れた。この数人は、体内に壊血ウィルスと共存しその毒性を無毒化するウィルスを持っていたため、血液の崩壊が起こらずに生き延びたのだ。しかし、この生存者に人間が接触すると、その人間の八割は死んだ。抗壊血ウィルスは感染者の二割ほどしか発症しない。それに引き換え、壊血ウィルスは百パーセント発症するからだ。このため、彼等は災厄を呼ぶ者として忌み嫌われ、人里かくれて住むようになった。これがヴェスパーの起源だという」
ラダは、呆然とサガの話をきいていたが、そこで我に返り、前ポケットの中のＩＣレコーダーにこっそりスイッチを入れた。
長年謎だった曾祖父の日記の真実が、今明かされようとしている。
録音がバレた時のことを考えるとそら恐ろしいが、ジャーナリストの端くれとして、ここで尻込みするわけにはいかない、と思ったのだ。
「ヴェスパーはもとは人間だったが、そのうちに抗壊血ウィルスの影響で身体的変化が起きた。人間の倍近い寿命や高い運動能力を持つ者が現れ、視力や嗅覚が増し、夜でも目が利くようになった。しかし、一番顕著なのは、第二小臼歯の裏側に生えた第二犬歯だ。抗壊血ウィルスは周期的に別株のウィルスを混合しないと、壊血ウィルスの毒性を無毒化する効果が消滅する。このため、時折ヴェスパー同士で少量の血液を交換し合わなければならない……それで、元々は性行為中の行動として、首筋の血管を噛み吸血する習慣が生まれた。ウィルスは唾液にも含まれているから、吸血される側もウィルスを貰うことになる。長い間にこの習慣は我々の生態をも変えた。ヴェスパーの女は首を噛まれる刺激で排卵する。そして、抗壊血ウィルスが弱り、無毒化の効果が薄れ始めると、強烈な飢餓感に襲われ他人の首を噛んで血液を吸いたくなる。……これが、我々の悲劇のもととなった」
「ちょっと待った。ということは、ヴェスパーが噛む相手は同じヴェスパーだ。相手が抗壊血ウィルスを持っていなければ無駄骨だからな……つまり、件の連続殺人の被害者は、皆ヴェスパーだったってことか？　……それに、

エマも……」
　アイオロスがそう言って、サガの話を遮った。サガは話の腰を折られて不機嫌に眉を寄せたが、アイオロスの質問に答えて言った。
「エマというのは、君の知り合いか？」
「俺が、昔付き合っていた相手だ。溶血性貧血で死んだ。……首筋に、咬み傷のような二つの傷があった」
「では、今君が刑事をしているのは、その彼女の仇を討つ為か」
　アイオロスが黙ってサガを睨んでいると、サガはふと艶やかに微笑し、先を続けた。
「話を戻そう。ヴェスパーは、鋭い嗅覚で人間とヴェスパーとを嗅ぎ分ける。それゆえ、どれほど飢えても、間違って人間を襲うようなことはしない。……しかし、このヴェスパーの生命維持本能を利用した人間達がいた。彼等は、ヴェスパーを一カ所に集めて閉じ込め飢えさせ、嗅覚を鈍らせて凶暴性を高めるように仕向け、ついに人間を襲う吸血鬼――ヴェスパイアを作り出した。夜目がきき、敏捷で、たったひと噛みで相手を殺す事が出来る……権力者にとっては、都合のよい暗殺者だったわけだ。ひっそり隠れて生きていた各地のヴェスパー達は全て人間に狩られ、残ったのは人間に家畜化されたヴェスパイアのみとなった。
　……とはいえ、ヴェスパイア一族も、ただ唯々諾々と人間の命令に従っていたわけではない。より強力な吸血鬼を作りたい人間の要求に答えながら、一族をまとめ人間から開放するための組織を作り上げた。それが、ヴェスパイアの王を中心とする組織だ。私とカノンは、その吸血鬼を生み出す研究所で生まれた最後の子供――そして、私は、先代の王から王の力を受け継いだ」
「最後の子供？　……ということは、その後、ヴェスパイア達は開放されたのか？　カノンは、俺もまたヴェスパイアの血をひいている、と言ったが、俺には牙は生えていないし、他人の血を吸いたいと思ったことは一度もない……。一体、ウィルスはどうなったんだ？　俺もまた、壊血ウィルスと抗壊血ウィルスを持ってる、ってことなのか？」
　ラダが身を乗り出して尋ねた。サガは、ラダの全身をじっと眺めてから、おそらくそうだ、と頷いた。
「我々で最後になったのは、カノンが生まれたからだ。――カノンは、我々ヴェスパイアが待ち望んでいた新型抗壊血ウィルスを持っている。新型抗壊血ウィルスは、壊血ウィルスを無毒化しつつ、身体に影響を及ぼさないのだ。それゆえ、カノンのウィルスを受け継いだヴェスパイア達は、人間の中に隠れて人として生きることが可能になった。君の祖先は、そんなヴェスパイアの一人だったかも知れないが、今となっては血も薄まり、ウィルスも日和見化しているだろう。現在世界に存在するヴェスパイアの末裔は、殆どがそういった血の薄いヴェスパイアだ。
　さて、ここからが本題だ。ヴェスパイアの歪められた本能は、人間の支配を離れて以降次第に薄れてきたが、時折先祖帰りのように凶暴な本能を持って生まれる者がいる。それでも、抗壊血ウィルスの更新がうまくいっていれば、彼等は人間を襲うことはない。以前は衛生観念が希薄だったお陰で、本人が意識せずともウィルスの交換が起こる環境はいくらでもあった。……現代は多少いきすぎた衛生観念のお陰で、他人の血液が体内に入る機会が殆どなくなり、抗壊血ウィルスが不活性化する者が現れ始めたのだろう。君が追っている事件の犯人は、おそらく飢えたヴェスパイアの末裔だ。既に抗壊血ウィルスが不活性化しているため、これに噛まれると人

間の体内では抗壊血ウィルスが発症せず、血液は壊血ウィルスの影響で凝固し、血球の破壊が始まる。一週間で、溶血性貧血により死に至る」

部屋に、重苦しい沈黙が満ちた。アイオロスは、エマのことを考えていた。

エマは、おそらく、飢えた吸血鬼に殺された。……しかし、その吸血鬼を造り出したのは、人間だという……。

「……では、万が一、人間が噛まれた場合は、カノンの血液から血清を作り、投与すれば命は助かる。そういうことなんだな？」

「いや、そうではない。先にも言った通り、抗壊血ウィルスの発症率は二割しかない。だから、カノンの血液を投与しても、普通の人間の八割は助からない。しかし、発症率は若年で高い傾向がある。カノンが助けた少年は峠を越したようだが、運が良かったのだ」

「それじゃ、俺みたいなヴェスパイアの子孫が噛まれた場合はどうなんだ？」

「その場合は、相手のウィルスの強度と自分が体内に持っている抗壊血ウィルスの強度で結果が変わる。……といっても、現在の日和見化した抗壊血ウィルスでは、おそらく太刀打ちできないだろうが……。しかし、もともと抗壊血ウィルスを体内に持っているなら、カノンの新型ウィルスとの適合性はあるだろう。従って、処置が間に合えば助かる確率が高い」

「その、新型ウィルスを提供できるのは、そこにいるカノンしかいないのか？　あんたはどうなんだ？　一卵性双生児だろう？　血清を人工的に作る方法は？」

アイオロスの問いに、サガは答えなかった。サガは黙って立ち上がると、室内に背を向け、夜の灯が散らばる窓の外に視線を投げて言った。

「……そうやって、人類は我々を追い回してきたのだ。私の弟を実験室のベッドに縛り付け、血を抜き、まるで家畜の品種改良を行うように、試験管に切り取った組織を並べ……第二、第三のカノンを造り出すために。……愚かな者達だ。カノンを生み出したのは、我々ヴェスパイアだ。人間の支配から逃れるために、何代もかけ、実験体となった何十人もの同胞の犠牲の上にようやく我々が生まれた。そして、我々二人の器官をひとつに集めて、やっと『カノン』が生まれたのだ……人間どもに、生み出すことなど出来るはずがない。

暴走ヴェスパイアは人間が生み出した悲劇だ。ならば、大人しくそのヴェスパイアに狩られて命を終えれば良い。我々一族が、どれほど残虐な方法で人間に滅ぼされてきたか……それを思えば、貧血で弱って死ぬなど、優しいものだと思わないかね？」

サガは、ゆっくりとまた室内に体を向けた。背後の窓に、沈み始めた月がかかっていた。その瞬間、アイオロスもラダも、脳天を殴られるような衝撃を感じ、よろめいた。

サガの、きらめく深い青の瞳。その不思議な光を見た瞬間に、意識に霞がかかり、姿勢を保っていられなくなったのだ。

二人はそのまま、声も立てずに部屋の床に崩れ落ちた。

深い、静かなサガの声が、波間を漂うように響いてきた。

「……明日になれば、今日起きたことは全て忘れているだろう……。しかし、安心するが良い。ヴェスパイアはもはや人間を襲いはしない……あれは我々の存在に気づいた。あとは、我々の問題だ……」

そこで、アイオロスの意識はぷっつりと途切れ、そのあとは、もう何も分からなくなった。